

ブラジル大統領選挙結果をノルデスチで考えてみた ー“苦渋の選択”だったー

岸和田 仁

はじめに

プライベートな所用があつて11月末に一週間ほどブラジルに出かけることになったので、この機会を利用して、ノルデスチ（北東ブラジル）のレシーフェ市並びにペトロリーナ市で様々な社会階層の人たちに今回の大統領選挙結果について聞いてみた。具体的には、タクシー運転手（5名）、大学教授、弁護士、農産加工工場労働者（4名）、灌漑農業従事農家、農産企業幹部（役員、部長、3名）、雑誌キオスク店主、といった人たちが計30名ほどだったが、無味乾燥な選挙データからは見えてこない、投票者の生身の人間としての思い・考えを彼らとの会話的雑談を通していささか体感することができた。

本稿では、まず選挙結果に関するいくつかのファクトを押さえたうえで、このノルデスチでの個人的経験に基づき、個人的メモを重ねることとしたい。今回の統一選挙（大統領、連邦下院議員全員、上院議員の約半数、州知事、州議会議員）では国民の多くが“苦渋の選択”を強いられたといえるが、彼らの声をこの小論に反映してみたいと考えたからだ。

大統領選の結果

今回の統一選挙は、一次投票（10月7日）、決選投票（10月28日）と二回に分けて行われた。大統領選の結果（有効得票率）については、

（1）一次投票の結果

- ①ボルソナロ 46.03% ②アダジ 29.28%
- ③ゴメス 12.47% ④アルキミン 4.76%

（2）二次（決選）投票の結果

- ①PSL（社会自由党）のボルソナロ候補 55.13%
- ②PT（労働者党）のアダジ候補 44.87%

汚職撲滅、治安回復を強調したボルソナロ候補（元陸軍大尉、現下院議員）の圧勝といえる。

前回2014年の大統領選は、ルセフ元大統領が勝利

したが、対戦者ネヴェス上院議員の得票率との差はわずか3%であったから、今回の11%の差の持つ意味は大きい。

PTが優勢だったノルデスチ（北東部）とノルチ（北部）

ブラジルは27の州で構成されるが、決選投票でアダジ候補の得票率が50%を超えた州は11州に及んだ。具体的にはノルデスチ（北東ブラジル）全州（マラニャン、ピアウイ、セアラ、リオグランデ・ド・ノルチ、パライーバ、ベルナンブーコ、アラゴアス、セルジッペ、バイーアの9州）並びに北部ブラジルのパラ州、トカンチンス州、である。このうちベルナンブーコ州の数字をみると、アダジ66.53%、ボルソナロ33.47%であったが、ノルデスチ全体の有効得票率はアダジ68.2%、ボルソナロ31.8%であった。

このファクトを政治地図として見れば、ブラジルの南北問題を素直に反映しているといつてよい。北部・北東部＝経済的な貧困地域＝PTの支持基盤、に対して、南部・中西部＝経済的に豊かな地域＝ボルソナロの支持基盤、とざっくり理解できるからだ。とはいえ、こうして南北問題（世界の南北問題とは逆に、ブラジルでは南が先進地域で北が貧しい地域）とか南北分断というように単純化するのは、リスクをとまなうことも事実だ。

例えば、都市部の投票結果をみると、レシーフェの場合、アダジ52.5%、ボルソナロ47.5%と拮抗しており、都市有権者のPT支持率はノルデスチ全体平均よりは15%も下回っている。すなわち、都市住民の中産階層は、南部だろうが北東部だろうが、PTに愛想を尽かした、と理解すべきである。

政治地図が大きく変わった二つの有力州

南東部のミナスジェライス州と南部のリオグラン

デ・ド・スール州という二つの大票田での変化に注目したい。ミナス州は、前回（2014年）はルセフ元大統領が過半数をおさえ、州知事にはPT候補ピメンテルが勝利したが、今回は、前回PTに投票した有権者のかなりの部分がボルソナロへ票を投じたため、ピメンテル知事は再選されず（一次投票で3位となったため決選投票にも行けず）、同じくミナス州から上院議員に立候補したルセフ元大統領は、最下位落選の憂き目をみた。リオグランデ・ド・スール州の場合も同様で、かつては州知事も州都ポルトアレグレ市長も何代もPTが押さえ、カウンター・サミットといわれた「世界社会フォーラム」を主導したり、市民参加型予算を定着させて“労働者党の牙城”といわれた州だったが、そんな面影は全くなくなってしまった。

前回（2014年）の選挙までは、何だかんだいいながらもPTに投票していた有権者の多くが、PT批判票に転じた最大の要因は、ラヴァジャット事件に象徴される汚職贈収賄の途方ない規模（一説では、その額420億レアルというから円貨換算で1兆円以上）に堪忍袋の緒が切れたからだろう。繰り返すが、この二つの有力州がPT支持からPT批判に転じたことの意味は深い。

レシーフェのタクシー運転手4人に聞く

タクシーという閉鎖空間においては運転手は一人演説に酔ってしまうことがしばしばだが、ノルデスチのタクシーの場合は、意外とお喋りでない運転手も少なくない。今回4人の運転手に聞くことが出来たが、支持候補については半々くらいかなとの事前の予想を覆して、ボルソナロ支持3名に対しアダッジ支持は1名であった。ボルソナロ支持の中年運転手はPT政権が如何に公金を横領したか長広舌をふるっていたが、アダッジ支持の運転手は、訥々と、一次投票ではゴメスに投票し、決選投票では悩んだ末アダッジを支持したが、今となってはボルソナロ氏が新大統領として政治を刷新してくれればと祈っている、と語っていた。

レシーフェの中産階層に属する弁護士、企業幹部らにも同様の質問をしたが、執筆者が会話を交わした彼ら（約10名）の7割方がボルソナロに票を投じていた。ノルデスチでは富裕層に属する彼らは、三つの危機（経済低迷の危機、政治混乱の危機、モラル破綻の危機）をもたらしたPTは許せない、と



哲学者 J.A. ジアノッチ（「VEJA」2018年10月31日号インタビュー記事）

というのが共通意見であった。

老哲学者の苦渋の選択

決選投票直前の総合週刊誌「VEJA」（2018年10月31日号）に著名な哲学者のインタビュー記事が掲載された。その哲学者とは、ジョゼ・アルトゥール・ジアノッチ USP（サンパウロ大学）名誉教授で現在88歳である。フランス留学時代は哲学者メルロポンティ（1908～61年）に師事していたが、哲学者としてはマルクスやウィトゲンシュタインの研究者として知られる左派知識人である。政治活動には直接コミットすることはないが、社会民主主義の支持者といえる。そんな老哲学者も近年は汚職まみれのPTを厳しく批判してきたのだが、今回の選挙については「苦渋の選択」でボルソナロ支持を表明したのだ。

彼の主張の要旨は、「決選投票の候補者二名とも問題がある。ボルソナロでは民主主義が毀損するリスクがあり、かといって、現在の三つの危機（経済的危機、政治的危機、モラルの危機）をもたらしたPTのアダッジ政権では政治が刷新される可能性はまずない。」「ボルソナロ・リスクのほうがアダッジ・

リスクよりも大きい、もう一つの可能性である、刷新の可能性もボルソナーロのほうが高い。どちらも問題でリスクが大きいことは承知しているが、どちらかを選択せよといわれれば、“ボルソナーロ・リスク”のほうを選ぶ」というものだ。まさに“苦汁にして苦渋の選択”だ。

このインタビュー記事は、まさに良心的知識人の苦悩の叫びと言える内容であったが、サンパウロであれノルデスチであれ中産階層の最大公約数的な意見をこの老哲学者が代弁したと解釈しても的外れではない。



“VEJA” 10月17日号表紙

遠隔地ナショナリズム

在外ブラジル人（登録有権者数は約60万人）の投票行動も実に興味深いものであった。米国、ポルトガル、英国、イタリア、日本などに居住する在外ブラジル人の投票結果は、全体の有効得票率でボルソナーロ71%、アダッジ29%であった。ブラジル国外の票田として第一位の米国に次ぐ世界で二番目の票田である日本での結果をみると、地域別のボルソナーロ得票率は東京90.85%、浜松92.1%、名古屋91.5%、群馬県大泉91.6%であった。

国外居住者のほうが本国住民よりも保守的なナショナリストになる傾向があると論じた政治学者ベネディクト・アンダーソンは、この傾向を「遠隔地ナショナリズム」と名付けたが、今回の選挙結果はアンダーソン理論を具体的に裏付けたといえる。

憂慮すべき事象——層の多党化と新人議員の過半数化

連邦下院議員を1議席以上獲得した政党の数は、1994年の選挙（レアルプラン成功のおかげでF・H・カルドーゾ大統領が当選した年）では16であったが、今回は、30政党と倍増している。多党林立というよりも小党乱立というのがブラジルの議会（下院）の現状である。こうしたいくつもの小党を政権側が惹きつけるための議会工作の「アメとムチ」が今後どうなっていくか、懸念される。ちなみに下院議員定数は513名である。



“VEJA” 11月21日号表紙 ボルソナーロ新大統領と3人の息子



“ISTOÉ” 誌 11月28日号表紙 次期ファーストレディー ミシェリ・ボルソナーロ

また、下院議員は新顔が増えたことも今回の選挙の特徴だ。前回 2014 年の統一選挙における下院議員の再選議員率は、53.22%で、初当選した新顔は 46.78%であったが、今回は新顔が 53.41%で再選議員は 46.59%と新旧が逆転している。

新政権に対して一期待よりも不安

経済的不平等を社会政策によって是正しようとした PT 政権は“社会自由主義”とも呼ばれ、「第三の道」のモデルにもなりうるとして世界中の政治研究者の注目を浴びたこともあったが、ブラジル政治の伝統のお家芸であった公金横領ノウハウを PT 風に“改悪”、いや“技術革新”して巨額の贈収賄スキームを作り上げたところで“自滅”した。その結果、元々 PT を支持していた有権者までが PT を見限った、というのが今回の選挙で明らかになったことだ。今回

の統一選挙によって示された民意とは、「PT 政権が継続されればブラジル社会が腐ってしまう、経済も治安も悪化するだけだ、したがってアンチ PT の候補に賭けるしかない、たとえ右翼的ポピュリストであっても」というものであった。

極言すれば、ボルソナロ候補は、PT のアンチテーゼとしてのみ存在理由があった。短期間ながらブラジルのノルデスチやサンパウロを訪ね、今回の大統領選について何人ものブラジル人と会話を交わしたが、執筆者が感得したことは、「新政権に期待したいが、それよりも不安のほうがデカイ」という国民の冷めた視線であった。

(きしわだ ひとし 日本ブラジル中央協会常務理事・
会報『ブラジル特報』編集人)

ラテンアメリカ参考図書案内



『あけましておめでとう』

フーベン・フォンセッカ 江口佳子訳 水声社
2018 年 11 月 257 頁 2,500 円+税 ISBN978-4-8010-0295-1

これまで 4 巻が出ている武田千香東京外語大教授編集の「ブラジル現代文学コレクション」の最新刊。1969 年から 21 年間続いた軍事政権は、大衆には「偉大なるブラジル」「進歩し続ける国」という肯定的イメージを宣伝したが、本書はその意に添わない「表面的な解釈では、エロティックでポルノグラフィ的なものと烙印を押してしまうであろう」と代表的週刊誌“Veja”の書評に書かれたとおり、1976 年に政府は猥褻性による「公序良俗」違反、社会的暴力の誘発を理由に発禁処分に処した。

リオデジャネイロを舞台にした 15 編の短編から成り、表題作は富裕層宅での大晦日のパーティを襲った残忍な強盗グループの行為を通じて高度経済成長の恩恵の格差を、「夜のドライブ I、II」と「他者」は企業の重役を主人公に、社会と他者との関係性の構築を否定した自己中心的に暴力行動にはしる姿を描くことで、下層階級・低学歴者の経済的不平等格差による教育格差、社会のコミュニケーションの対立・断絶を問題提起している。「大腸」は排泄に結びつくものとして清潔でない器官とのイメージから、そういったものを描くのは“ポルノグラフィ”作品と言われるが、身体を理解は暴力行為の回避に繋がら表現の自由が必要との持論をもつ老作家へのインタビューの形をとって、著者の多面的な視点への価値観を主張している。

著者は、1925 年生まれで 8 歳の時にリオデジャネイロ市に移り、1951 年から 58 年の間リオデジャネイロ州警察で働き、民間電力会社に転職してから演劇・映画シナリオを書いて作家デビュー、会社重役にまでなったが 79 年以降作家業に専念し、ベストセラー作家の評価を得た。

(桜井 敏浩)